

「何か」の一例として、「生きる自信」が挙げられる。筆者は、普通の遊び、体育などの授業、自然に触れる経験を通して「何か」がふくらんだ、と述べている。そこに垣間見えるのは、友だちや先生たちとの助け合いや語らいであり、自然の中で生きる動植物に触れたときの生命のたくましさへの驚きだ。このような経験を通して、筆者の中に「なんとか生きていける」あるいは「なんとでも生き抜いていく」という決意にも似た自信が生まれたのではない。

本文を読んで、私はボランティアには3つの視点が必要だと考えた。第一に、ボランティアをする側の心の問題だ。「上から目線」を捨て、相手の立場に立つ必要がある。そうでなければ、感謝されて当然だという傲慢な気持ちが生まれてきたり、相手への厚意を押し付けるという結果になりかねない。第二に、ボランティア、は一部の人たちがする特別な活動ではないということだ。普段から身近な人を大切にするという気持ちがあり、その延長線上に困っている人を助けたいという気持ちが芽生えてくる。その気持ちが形になったものがボランティア活動ではないだろうか。第三として、チームワークという視点だ。確かに個人でできるボランティアもある。しかし、誰かを何年間にもわたって支えるとき、個人では限界がある。チームとして運営され、交替で負担を軽減しながら、個人のできる範囲で息長く支援を継続することが大切だ。

物忘れがひどくなり、自分のお金を嫁が隠したとか取ったとか言って、事実ではないことを事実と思い込み、さらに嫁いじめをするようになった。また、家人が怒ると興奮し、夜寝ないでぶつぶつ何を言ったり、叫んだりする。さらに、さっき食べたのに、そのことを忘れてまた食事をしようとする。

自分の孤独や苦しみを理解してもらえる存在に出会えたことで安心し、我慢していた思いが涙となってあふれたから。婆さまは、家族から厄介者扱いされ、邪険にされ、不快な日々を送っていた。孫たちも寄り付かず、近所の人も尋ねてこなくなった。汗くさい着物や足首を覆う白いあかからは入浴も十分にできていないような不衛生な状態であることがうかがえる。このような状態で自尊心を持てるはずもなく、絶えず不安で淋しい気持ちでいたであろう。そのような中で、他人であるに関わらず自分の話を親身に聴き、寄り添おうとしてくれる医師に出会えたことで、婆さまは自分という存在が認められ、理解され、救われたと感じたに違いない。